『論叢』玉川大学教育学部紀要　2015，pp. 143～149

［実践報告］

印刷教材等による授業と面接授業における学修の達成度の検討

田畑　忍

要　約

大学における通信教育課程には,「面接授業」「印刷教材等による授業（以下, テキスト授業）」「放送授業」「メディアを利用して行う授業」がある。多くの通信制大学では，テキスト授業を中心に日常の学修指導を行っている。通信教育課程には，通学課程と同等の学修指導及び結果（以下，達成度）が求められている。通信教育課程における学修指導で中心的な役割を果たしているテキスト授業の適切な授業モデルを開発するため，テキスト授業と面接授業における学修の達成度を検討することとした。本論文では，その調査結果について報告する。

キーワード：テキスト授業，面接授業，達成度

Ⅰ．はじめに

大学の通信教育課程における学修指導の方法は，大学通信教育設置基準（文部科学省令）に示されている。面接授業，テキスト授業（印刷教材等による授業），放送授業，メディアを利用して行う授業である。このうち，本学では，面接授業とテキスト授業を行っている。面接授業では，学生は，大学キャンパス等の指定された場所で通学課程と同様の対面指導を集中講義形式で受ける。面接授業はスクーリングと呼ばれる。本学の面接授業には，15コマを4日間で実施する春期スクーリングや土日スクーリング，6日間で実施する夏期スクーリングや通学スクーリング，3日間で実施する地方スクーリング等がある。

近年はICTの併用も増えてきたが，メディアを利用して行う授業のみで授業を展開しているサイバー大学等を除き，多くの通信制大学では，テキスト授業を中心に日常の学修指導を行っている。本学のテキスト授業の場合，授業の課題はレポート課題集という冊子にまとめられている。そこには課題の他に，レポート作成時の留意点や評価の基準等が科目ごとに詳しく示されている。学生はテキストを読み，レポート課題集を確認し，1単位につきレポートを1つ提出する。レポートの文字数は，2000 ～ 2400文字である。テキスト授業には面接授業と同様にシラバスがある。シラバスには，科目概要や到達目標，テキスト学修の留意点，科目試験のア

所属：通信教育部　受理日　2016年2月19日

ドバイス，教員からのメッセージ，参考文献が載せられている。また，面接授業のシラバスと同様に，学修内容を15回にわけて各回のテーマや課題も示されている。一般書をテキストに指定している場合，テキストによる学修を進めやすくするために，各章の解説や科目の定義等を示した学修指導書と呼ばれる補助教材もある。

テキスト授業では，学生は，テキスト，レポート課題集，シラバス，学修指導書等を利用して学ぶ。テキスト授業では，学生と教員のレポートのやり取りが授業の中心である。そのため，教員は個々のレポートに対して丁寧な添削指導を行う。筆者の担当している科目の場合，1回の提出で合格する学生もいるが，ほとんどの学生は2回以上の添削指導を受けて合格する。中には，5回以上添削指導を繰り返して合格するケースもある。なお，単位修得のためには，学生はレポートの合格だけではなく，科目試験に合格する必要もある。科目試験は年8回，全国57都市で実施している。各回，土曜日と日曜日の2日間実施している。したがって，同一科目で16種類の問題があり，学生はテキストをまんべんなく学修し受験する必要がある。

文部科学省の教職課程認定基準では，「通信教育の課程において，教育課程及び教員組織については，通学教育の課程に準ずる」[1] とされている。また，大学通信教育基準には「学士課程，修士・博士課程の目的を達成することができるよう，その水準維持に配慮する必要がある」[2] とある。つまり，通信教育課程には，通学課程と同等の学修指導と達成度が求められている。しかしながら，テキスト授業と面接授業の学修の達成度を直接検討した報告は見当たらず，実情が確認されていないままに学修指導が行われていると考えられる。

Ⅱ．目的

筆者らは，通信教育課程の学修指導で中心的役割を果たしているテキスト授業における適切な授業モデルの開発を目指している[3]。

そこで本報告では，テキスト授業における学修の達成度を確認する。これにより，テキスト授業の実情を確認し，テキスト授業における適切な授業モデルを開発する際のデータのひとつとする。

Ⅲ．達成度の検討方法

テキスト授業における学修の達成度を検討するため，テキスト授業の科目試験の結果と面接授業の期末試験の結果を同一の科目で以下の通り確認する。なお，本報告は筆者の実施した1科目の結果のみではあるが，同様の調査を通信教育部内の複数の教員の科目で実施している。また，筆者の担当する別の面接授業においても同様の試験を実施している。

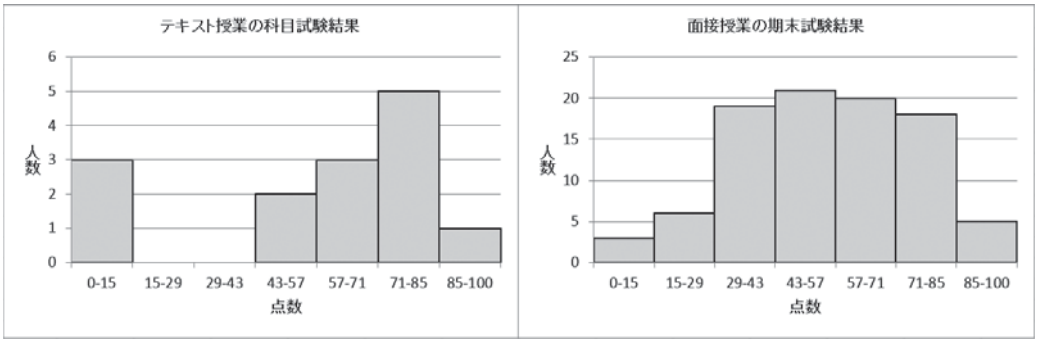
- 対象科目
  - 教育の方法と技術
- テキスト授業の科目試験の実施日及び受験者数
  - 第3回科目試験…平成27年7月19日
  - 受験者数…14名
- 面接授業の期末試験実施日及び受験者数
  - 夏期スクーリング…平成27年8月16日
  - 受験者数…92名
- 試験問題
  - 「評価マトリックスについて説明しなさい」
- 採点基準（100点満点とした場合）
  - 評価マトリックスを利用する目的について示されているか。…10点
  - 分割表が正確に示されているか。また，説明は正しいか。…30点
  - 事前テスト等の説明は正しいか。…各5点，計15点
  - 表中の項目に関する説明が示されているか。…各5点，計25点
  - 教授活動の効果を求める式が示されているか。また，説明が正しいか。…20点

面接授業の期末試験では，上記の試験問題の他にも問題を出題している。そこで今回，科目試験及び期末試験の結果を上記の採点基準で採点し直した。したがって，両試験の結果においては一部，それぞれの試験後に採点した結果と異なるものもある。

Ⅳ．結果

以下では，本調査で実施したテキスト授業の科目試験と面接授業の期末試験のそれぞれの結果を示す。グラフ中の点数については，「以上-未満」で示しているが「85−100」については100点の学生も含めている。テキスト授業の科目試験の平均点は53.2点（SD = 30.86），面接授

表　科目試験・期末試験の結果



業の期末試験の平均点は54.5点（SD = 20.99）であった。テキスト授業の科目試験の0–15点範囲の3名については，ほぼ白紙，またはまったく見当違いのことが書かれていた。この3名を除くテキスト授業の科目試験の平均点は67.7点（SD = 12.52）であった。テキスト授業におけるデータ数が少ないので不十分な検定ではあるが，Welchの検定では，テキスト授業の科目試験と面接授業の期末試験の結果は0.8813で有意差は認められないが，テキスト授業の下位3名を除く結果では0.0074（t＜0.01）で有意差が認められた。

なお，今回の面接授業における成績評価の内訳は，「授業への参加度（発表等）…25％」「作成した課題…25％」「期末試験…30％」「出席…20％」としている。したがって，上記の点数がそのまま面接授業の評価にはなっていない。

Ⅴ．考察

本調査では，テキスト授業の科目試験と面接授業の期末試験で同じ問題を出題し，同じ基準で採点した。本調査を行う前は，面接授業の期末試験の達成度の方が有意に高いのではないかと考えていたが，上記の通り，テキスト授業の科目試験における下位3名を含む両試験の平均点にほとんど差は見られなかった。

平均点にほとんど差は見られなかったが，両試験の結果にはいくつかの特徴が見られた。以下では，評価基準でSまたはAの80点以上を上位層，評価基準でBまたはCの60 ～ 79点を中位層，評価基準でFの59点以下を下位層として本調査の考察を述べる。

1. テキスト授業の科目試験の結果について

先にも述べたが，下位層の学生のうち3名（21％）については，ほぼ白紙，またはまったく見当違いのことが書かれていた。他の下位層2名の学生との点数差も大きい。今回の科目試験の試験問題については，テキストの章末にある演習問題に「評価マトリックス」というキーワードが示されている。また，シラバスにも，「各章や節の最後に載っている演習問題に取り組んでみましょう」「科目試験についても，テキストで示されているキーワードについては適切かつ正確に使用することが求められます」と示している。今回の科目試験では，中上位層の学生が64％いることから，受験に向けてしっかり学修している学生とそうではない学生に差があると考えられる。これについては，守屋による先行研究[4]で通信教育課程における学力の2極化が以前より指摘されている。学力差だけではなく，学修の取り組みにも差があると考えられ，今回の科目試験においては，学修のポイントが把握できていないまま受験していた可能性もがある。彼らに対する何らかの支援が必要である。一方で，下位3名を除く平均点が面接授業の期末試験の平均点より高いという結果がある。彼らに対してより適切な指導を行うことができれば，テキスト授業において学力の質保障を実現することができると考えられる。

なお，中位層の学生の多くが評価マトリックスの分割表を書くことができていた。しかしながら，「表の一部が正確ではない」「分割表の項目に関する説明が不十分」等の理由により，点数が低くなるケースが見られた。また，事前テストや事後テスト等の説明が不十分だったケースも多く，減点の対象となった。

2. 面接授業の期末試験の結果について

今回の期末試験では，53％の学生が下位層となったが，多くの学修内容を集中的に学ぶ面接授業において，解答をまったく書くことができなかった学生は一人もいなかった。評価マトリックスや事前テスト等の用語の説明についてはほぼ全員が解答することができていた。しかし，分割表を書くことができている割合は下位層ではほとんどおらず，中位層の学生でもテキスト授業の科目試験で分割表を書くことができていた割合と比べて低い結果となった。

上位層の学生の割合は20％であったが，内2名はしっかり理解できており，解答に不足はなかった。他の上位層の学生の多くも，記述している内容についてはほぼ正確であり，上記の採点基準では，評価マトリックスの解答として不足している部分の減点のみであった。

今回の面接授業の期末試験の場合，他にも問題が出題されていたため，「評価マトリックスについて説明しなさい」という問題に費やすことのできる時間や紙面がテキスト授業の科目試験より少なかった可能性がある。

3. 両試験の結果から

両試験の結果を確認すると，テキスト授業の科目試験では，0 ～ 9点の範囲であった学生が3名（21％）いたが，面接授業の期末試験ではいなかった。一方，面接授業の期末試験では，30 ～ 39点の割合（17％）がもっとも多い結果であった。また，40 ～ 49点の割合（15％）も多く，10 ～ 19点（3％），20 ～ 29点（7％）もそれなりにいた。これらの結果から，面接授業では学修内容の理解に差があるものの，重要なキーワードについてはある程度，記憶に残すことができたと考えられる。一方，テキスト授業の場合には，重要なキーワードを理解しないまま，学修を進めていた学生がいた可能性がある。

60点以上の中上位層の割合で見た場合，テキスト授業の科目試験では64％，面接授業の期末試験では47％であり，テキスト学修の学生の割合の方が多かった。80点以上の上位層の学生の割合では，テキスト授業の科目試験では7％，面接授業の科目試験では20％であり，教員の求める解答まで至っている割合は面接授業の方が多い結果となった。今後，授業中の指導内容等を確認する必要があるが，面接授業で評価マトリックスの説明をする時，筆者はテキストの内容を過不足なく説明しているつもりである。にもかかわらず上記のような差が現れるということは，テキストの内容を動画などでわかりやすく解説すれば，テキスト授業で学んでいる

中位層の学生の理解度はより高くなる可能性があると考えられる。

Ⅵ. まとめと今後の課題

通信教育課程の学修指導で，中心的役割を果たしているテキスト授業の適切な授業モデルの開発を目指し，本調査では，テキスト授業と面接授業の学修の達成度を検討した。両授業の達成度を確認するため，テキスト授業の科目試験と面接授業の期末試験において同じ問題を出題し，同じ基準で採点した。テキスト授業では，重要なキーワードを理解しないまま学修を進め，科目試験を受験している学生がいる可能性を確認できた。彼らへの支援が必要である。一方で，今回の調査では，テキスト授業の方が面接授業と比べて中上位層の点数を取っている割合が多いという結果であった。これは，集中講義形式で行う面接授業よりもテキスト授業の方が，試験対策をした学生が多い可能性を示している。テキスト授業では中位層の学生が多かったことから，テキストの内容をわかりやすく解説するなどの支援を行えば，テキスト授業で学んでいる中位層の学生の理解度はより高くなる可能性があると考えられる。

今回の調査では，テキスト授業の科目試験と面接授業の期末試験の問題数が違っていたり，科目試験のデータ数が少なかったりする等，十分な検証を行うことができなかった。今後は，それらの課題を改善するとともに，他の科目において実施しているデータの分析を行い，テキスト授業と面接授業の学修の達成度を比較することとする。その上で，テキスト学修と面接授業の達成度に有意差が確認された時にはその原因を多角的に追究し，通信教育課程におけるテキスト授業の課題を明確にし，テキスト授業における適切な授業モデルの開発を目指すこととする。

本研究は，平成27–29年度　科学研究費補助金（15K04246，代表：田畑忍）の助成を受けたものである。

参考文献

1）文部科学省「平成25年度教職課程大学等実地視察について」
2）大学基準協会「大学通信教育基準」2006年，大学基準協会資料第63号
3）田畑忍，守屋誠司，山口意友，魚崎祐子「通信教育における『印刷教材等による授業』の質保証を目指して」日本教育工学会第31回全国大会発表予稿集，2015年，pp. 247–248
4）守屋誠司「小・中学校の数学教育を支える教員養成について」2014年度数学教育学会春季年会発表論文集，2014年，pp. 172–174

A Study on Learning Achievement of Text-based Class and Face-to-Face Class

Shinobu TABATA

Abstract

The Correspondence University has four teaching methods (face-to-face class, text-based class, broadcast class, class through communication media). Almost Correspondence Universities put text-based class at the center of everyday classes. Correspondence course takes equivalent result and instructions. We are aiming at development of instruction model of text-based class. So we conduct an exploration of learning achievement between text-based class and face-to-face class. In this study, we report findings.

Keywords: text-based class, face-to-face class, learning achievement